

戒律の現代的意義

—— 佛敎大學授戒會を考慮して ——

三 枝 樹 隆 善

- 一、はしがき
- 二、建学の精神と學生授戒會
- 三、學生授戒會の方法と内容
- 四、十二門戒儀の教育的意義
- 五、むすび

一、はしがき

一九八五年五月十五・十六日の二日間、淨覺仏敎研究所（所長・淨心法師、中華民國台灣省台北市健康路）の主催で、台灣省高雄縣島松郷の澄清寺大講堂において、第三回國際仏敎學術研究會が開催された。仏敎大學は、この研究會に招聘をうけて、仏敎大學仏敎文化研究所長坪井俊映教授以下七名が参加することになり、その一人に私が加えられた。今回の研究會の統一テーマは「戒律の現代的意義」ということであつた。私は、仏敎大學で毎年おこなわれている學生授戒會に關係し

ていることから、私には、とくに學生授戒會の実状と大學における授戒會の意義について研究報告をするように要請があつた。

主催者の淨心法師は、研究會の開催に當つて、開會の辭のなかで、研究會の目的とその意義を簡潔に、次のように述べられた。「今回の研究會は、戒律の現代的意義をもつて主題とする。ついでには戒律の問題を研究するが、これは現代の仏敎徒に対してだけでなく、出家の僧尼に対しても、最も重要な意味をもつ問題である。それゆゑに二日間ばかり短い時間であるが、また今回の會議に参加された法師各位と教授と學生たちと、その心を一つにして戒律の現代的意義の問題を熱烈に討議し、そして、各位の同心協力によつて積尊戒律制定の根本聖意を闡明にし、仏敎の戒律を現代社會のなかに、その偉大な機能を發揮して、その神聖な事業と重大な任務を完成することができることを希望する」。

戒律は、積尊が弟子たちのために約二千五百年前にインドの生活環境に應じて制定されたものである。それがすべて現在の社會環境や生活に適合するか否かは研究を必要とすることである。このたびの仏敎

學術研究会開催の目的は、「釈尊の戒律精神を把握し、戒律を現代的に活かして、仏弟子の生活規範とすることを研究する」ことにあった。研究会は、この目的を達成するために熱烈な研究討議をおこなって有意義に終ることができた。

今回の研究発表会の要旨は、日本文と中国文で『第三屆國際仏教學術研究論文集』として、浄覚仏教研究所から発行された。その目次はつぎのとおりである。

戒律と社会倫理―特に不殺生戒の現代的意義―
戒律と現代社会生活―日本真言の戒律を通じて見て―

浄土宗教団の戒律(法度)

仏教の戒律と現代生活

釈道安の戒律観

法然浄土教と社会倫理―特に法然浄土教を中心として―

朝鮮後期における戒律思想
西山の戒念一味について

五戒為実践大同世界之基礎

三皈即戒論

戒律生活与日常生活

勝鬘經義疏十大受章における三聚淨戒の意義

ところで、戒律は一種の宗教道德であり、人びとの宗教的生活規範である。いかなる宗教においても各自の宗教的生活規範が要求されて

いる。仏教の戒と律は現代社会の道德と法律によく似ている。すなわち戒は道德に、律は法律に相当する。しかしながら、宗教としての戒と律は単に一般社会の道德や法律よりもよりいっそう高いものである。それは、仏教によって説かれている戒と律は人びとが仏になること(成仏)を目的としているからである。

戒は、サンスクリット語の Śīla(尸羅と音写)の訳語であって、しばしばおこなうという意味であり、行為、習慣、性格、道德、清淨行などと訳されている。教義的には三学や六波羅密の一つであって、仏教道德の総称となっている。戒はもとより禁制の意味があるから、消極的には非を防ぎ、悪を止める力となり、積極的には諸善發生の根本となる。その結果においては、人の三業(身・口・意)の炎を消滅し、心身を淨め、反覆習慣の修習する行持によって威容戒徳があらわれて、香り高き人格が形成されてくる。それゆえに、戒は成仏(真人)を目的とした行為ということになる。釈尊は、勤苦六年の修行の結果、大自然の宇宙の法則道理を悟られ、みずからその法則に従って生活され、全人類に正しい生活行為のあり方を説き示された。釈尊が説かれた八万四千の法門は悉く人間形成の教えであり、人格完成の道であって、仏教はそれがそのまま戒であるということができようであろう。

律は Vinaya(毘奈耶と音写)の訳語で調伏と漢訳されている。原義は除去というが、転じて悪行為を除去する指導、または訓練、規律を指し、釈尊が出家の弟子たちの悪行あるごとに制誡し規定した仏教僧団の法律、規則に名づけられている。

したがって、戒と律は共に仏道修行者のよるべき要諦であるから、

坪井 俊映	成田 貞寛
金岡 秀友	以上。
安居 香山	
玉山 成元	
三枝樹隆善	
佐藤 心岳	
深貝 慈孝	
韓 泰植	
高城 宏明	
成 一	
楊 白衣	
淨 心	

その原語の意味からすれば区別して取り扱わなければならないが、実際には古来より戒と律とは混同して使用され、戒律と熟語されている。今回おこなわれた研究会においても、主題は「戒律の現代的意義」と表示されているが、私の研究報告も、この研究会における発表の一端であったから、今ここに主題をそのまま使用することにした。私は、浄覚仏教研究所印行の『第三屆國際仏教學術研究會論文集』に研究発表の概要を記載したが、ここに改めて稿を草して本論集に掲載することにした。なお、本稿は実際に即して叙述したことを申し添えておく。

二、建学の精神と授戒会

仏教大学は、学則第一条に「本学は学校教育法第五十二条に基づき、仏教精神により人格識見高邁にして、活動力ある人物の養成を目的とし、世界文化の向上、人類福祉の増進に貢献することを使命とする」と規定している。これは本学の教育方針が仏教精神に基づいており、本学が、仏教精神をもって建学の精神としていることを明らかにしている。

いったい仏教精神とは何であろうか。抽象的概念であるが、仏教精神とは、仏陀の知恵と慈悲の大悲心の実践であって、具体的には「上求菩提下化衆生」の大乗菩薩の根本精神を指すということが出来る。それはまた狭義についていえば、法然上人の「自信教人信」の願往生の思想信仰にほかならない。いうならば、本学は、法然上人の宗教的

人格を奉戴して教育の理念としているのである。

『仏教大学史』の記述によれば、かかる教育理念のもとに開学以来、仏教精神による人材の育成につとめ、有為の人材を社会に送り、また学術研究者を養成してきたが、それは主として宗門の子弟に限られていた。そのような中で、仏教精神に基づく教育の普及と教育の機会均等を計り、昭和二十八年に通信教育課程が設置され、さらに昭和三十七年には社会の要請に応じて応用仏教ともいえる仏教福祉学科が増設された。しかしながら、仏教学部という制約もあって仏教教理の研究に始終するきらいがあり、本学の教育目的が充分に發揮できない状態にあった。これは本来の立場からみても、もっと広く人文科学や社会科学などの関連において仏教精神を根幹とする諸学科を設置することが望ましく思考された。そこで広く一般に開放することとなり、仏教学部は文学部に組織改変されて、仏教、国文、史学、教育、英文の五学科が逐次増設された。一方、社会学部も併設されて、社会福祉、社会の二学科が置れることになる。昭和六十一年度には中国文学科が文学部に新設される予定であるが、さらに今後学部学科の増設がなされるであろう。本学に開設されるすべての学部学科は、いうまでもなく仏教精神に立脚しているものである。

ところで、現在本学においては、寺院子弟の学生については宗教的情操教育をおこなう場が多いので問題はないが、一般学生においてはこれをおこなうことはなかなか困難である。本学では、一般教育科目に仏教学を必修科目として履修することになっているが、宗教教育のより効果的な実をあげることは至難である。また現在宗教部がおこなっ

ている毎朝の宗教行事や、月例の宗祖法然上人聖日法要ならびに
 釈尊誕生会、成道会、涅槃会などの宗教行事を通じて、仏教徒とし
 ての信仰に導くことはまた容易なことではない。

かえりみるに、一九六九年頃から、日本は安保闘争をひかえて大学
 は全国的に学生運動が盛んとなり、大学問題として大きな社会的問題
 に発展した。この原因の一つとして、今日の学生が自己にとらわれ、
 自己中心主義におち入って真実のよろこびを知らず、他の非を責める
 ことがはげしく、他をかえりみようとしないなどということが指摘さ
 れた。本学の学生部は、こうした学生たちの一面の欠陥をみずからみ
 つけるということで、初めて授戒会を実施したのである。

それは、昭和四十四年九月六日から十日まで四泊五日の日程で比叡
 山(黒谷青竜寺(法然上人ゆかりの地))において、まず女子学生のため
 に開庭された。勸誡師は学生授戒会に経験の深い三枝樹正道教授(京
 都家政短期大学長・本学兼任教授)が当り、四日間の説戒がおこなわれ
 た。四日目の説戒が終了すると夕刻には東山の浄土宗総本山知恩院に道場
 を移して、翌日は阿弥陀堂においてときの浄土門主岸信宏貌下を伝
 戒師に仰ぎ厳肅な正授戒をうけた。参加の学生善女は四〇名、全員法
 悦の中に授戒会を終了した。

ついでその翌年、二月十四日から十八日まで四泊五日の日程で道場
 を浄土宗総本山知恩院に設けて開庭された。勸誡は浄土宗門の高徳、
 藤井実応師(現浄土門主)が大学より依頼をうけて四日間の説戒がお
 こなわれ、前回と同じく阿弥陀堂において浄土門主岸信宏貌下から正
 授戒をうけた。参加学生善男子十八名であった。

またこの年度には、九月六日から十日までの五日間にわたって知恩
 院道場で第三回目の授戒会が開催された。授戒会の内容については前
 回とまったく同様であったが、このときは男女学生合同でおこなわれ
 た。

折しもこの時期は学生運動が苛烈化し、各大学は紛争に紛争を重ね
 てバリケードによる封鎖など大学は荒廃しきっていた。もはや大学に
 は教育不在の時代が到来したかのようであった。仏教大学においても
 この影響を多分にうけ、真似をする一部の学生もあった。しかし大勢
 としては平穩な大学であった。こうした社会的背景の中にある大学が、
 自己省察のために学生授戒会をもったことに重要な意義があった。そ
 れは教育不在の多数の大学の中で、教育をする大学としての真価を発
 揮したことになる。大学史は以上のように記している。⁽⁴⁾

こうして仏教大学における学生授戒会は、建学の精神を具現し、そ
 ののち毎年おこなわれることになるが、中には二度三度と聴講を重ね
 る学生もいた。授戒会が初めて開庭されてから四年後には、全学生の
 宗教的情操教育の涵養をさらに重視して宗教部が新設された。宗教部
 は宗教部長と宗教主任ならびに副主任が中心となり、各学科の教員か
 らおのおの一名、また事務職員から数名を選出して宗教部委員会が組
 織されて運営に当ることになった。宗教部委員会はその目的を次のよ
 うに明示している。

宗教部委員会は宗教部長の所轄とし、学生の宗教的情操教育および
 実践仏教の訓育指導に関する重要事項について審議を行なう。(第

委員会は学生の宗教的情操教育および実践仏教の訓育指導に関して必要に応じて教授会を代行することができる。(第七条)⁽⁵⁾

このようにして、本学における宗教的情操教育は活潑な方向へ進展して、その一端をになって開催される学生授戒会も宗教部の担当となり、全学あげての活動が実現された。授戒会はいよいよ充実して学生間に絶大な好評をえて、ある年度には百二十名を越えるまでに至った。しかし、その数は増加した学生の全体からみれば僅少ではあるが、学生の宗教教育に甚大な影響を与えていることは事実である。それは、授戒の会座に参加した学生たちの寄せた手記を見れば明らかである。⁽⁶⁾

三、学生授戒会の方法と内容

仏教大学は、浄土宗教育資団の設立によるものであって、教育の理念については先にも述べたとおり、法然上人の全人格を通して仏教精神を具現することにある。したがって、学生授戒会もその宗教的情操教育の一端として開催されるわけであるから、当然、法然上人の教えに随順して授戒会がおこなわれなければならない。

法然上人によって開創された浄土宗では、普通在家一般の者に授戒して仏教すなわち浄土信仰に入らしめることを結縁授戒と呼んでいる。いわば仏教入門の儀式作法である。日本における結縁授戒は初め聖武天皇が鑑真和上から菩薩三聚戒を東大寺大仏前において授戒され、ついで清和天皇が皇后とともに慈覚大師から十二門戒儀によって授戒

され、そして高倉天皇が法然上人から授戒されたことを結縁の三大授戒といっているが、鎌倉時代になると武家の授戒もおこなわれて次第に一般化されるようになった。この時代の授戒は多くは一日で授戒したようであるが、江戸時代の中期ごろから、勸誡(説戒)の必要が生じてか、七日間あるいは五日間と日数を定めて戒会が催され、初めに勸誡して授戒の意義や戒法の講説をして、最後の日に正授戒の儀式作法をおこなうようになった。今日では社会的事情から期間が短縮されてまちまちであるが、本学においては当時浄土宗一般寺院におこなわれていた形式にならって最初は五日間を定めていたが、十年を経過して期間は三日間に短縮された。その戒会は前二日間を前行すなわち説戒を中心として晨朝、日中、日没の三時に宗教行事(浄土宗勸行式による礼拝・勸行)をおこない、三日目を正授戒とするのである。前行二日間の宗教行事は大学の宗教部が指導に当り、正授戒の行事はすべて知恩院に依託されていた。

ところが、昭和五十八年度からの授戒会は諸般の事情から道場の変更となった。そこで大学は大学独自の戒会を発揮するために一層の考慮がなされ、伝戒師は学長がつとめ、勸誡師(説戒)は宗教部長がその任にあたり、教授師は宗教部委員から、その他の役割はすべて学内教職員(浄土宗教師有資格者)が担当することになった。戒会の道場は嵯峨の五台山清涼寺が選定された。清涼寺は周知のとおり釈迦堂とも呼ばれて、三国伝来生身の釈迦如来像(国宝)が安置されている。また境内の雰囲気も学生が安らぎにつつまれる場所であり、ことに生身釈迦如来の尊前は戒会の道場として最適といわなければならない。か

くして、授戒会に大学の独自性が發揮されているのである。

さて、学生授戒会の内容であるが、日別の時間割や宗教行事の差などには注記⁽⁸⁾として、まず勸誡は説戒師独自の「説戒要綱」を作成して受者の学生に配布する。要綱は主として十二門戒儀の解説であるが、序説と本説とに分けて六時間の説戒がおこなわれる。勸誡の時間としてはいささか短かいようであるが、実際には受者学生の理解と体得はまさに頓速というべきであって、これは適度の説戒時間であるといえるであろう。

説戒は、授戒作法が示される『十二門戒儀』によってこれを細説するのであるが、『十二門戒儀』はもとより、唐の荆溪湛然(一七八二)が著わした『授菩薩戒儀』一巻⁽¹⁰⁾の異名であって、その内容が十二門の順序によって授戒の作法が記されていることから名づけられている。また荆溪湛然は妙楽大師と尊称されていることから、この戒儀書は普通には妙楽の『十二門戒儀』と呼んでいる。

『授菩薩戒儀』という戒儀書は数種の異本があって、その中には、法然上人の作と伝えられる『授菩薩戒儀則』一巻⁽¹¹⁾と『授菩薩戒儀』一巻とがある。前者は「黒谷古本戒儀」と呼ばれ、後者は「新本戒儀」と称されている。古本戒儀は鎌倉時代より江戸時代の中期頃まで、浄土宗の授戒に使用されていたようであるが、その後は今日まで新本戒儀が浄土宗の戒儀として使用されているので、本学の授戒会には新本戒儀を基本としておこなわれ解説するのである。十二門とは、第一開導、第三帰、第三請師、第五発心、第六問遮、第七授戒、第八証明、第九現相、第十説相、第十一広願、第十二勸持、以上である。

説戒師は説戒のはじめに、受者一同に十念(念仏十遍)を称えしめ、つぎの「釈迦仏の伝誦」を独唱する。

大衆、心に誦らかに信ぜよ。汝は是れ当成の仏、我れは是れ已成の仏なりと。常に是の如き信を作せば、戒品已に具足す。一切の心有らん者は、皆応に仏戒を撰くべし。衆生、仏戒を受くれば即ち諸仏の位に入る。位大覚に同じれば、真に是れ諸仏の子なり。大衆皆恭敬して、至心に我が誦することを聴け。(梵網經)

ついで、受者一同はこの伝誦をうけてつぎの「開講の偈」を唱える。みほとけの、説きたまえる真理の道は、その理甚だ深くして相い遇うこと難し。我れ今幸いにして耳に聞き心にとどめることを得たり。願くは、みほとけの真実の道をたどらん。

これより説戒が始まる。説戒はすでに授者学生に配布された「説戒要綱」によってすすめられるが、「説戒要綱」の内容は省略する。説戒は仏戒すなわち円頓菩薩戒を解説するのであって、その順序は十二門戒儀によっておこなう。説戒において最も注意しなければならないことは、本学における授戒会を意義あらしめなければならない。したがって、勸戒においては受者学生をして、法然上人の浄土仏教の信仰に向け、称名念仏せしめるように務めることが肝要であろう。

受戒の根本は念仏生活でなければならない。すなわち、戒とは信仏念仏の生活であって、仏を信じ仏を念ずる精神の活動が第一である。崇高な釈尊の人格に打たれ信順せるさま、それは如来と共に生きる姿であって、これはまた同時に、阿弥陀仏への思慕となり帰命となって表明されなければならない。称名念仏こそすべての戒を含み念仏生活

の中に自然任運として戒法は実践されていくのである。法然上人が「南無阿弥陀の名号の中には、四智、三身、十力、四無畏等の内証の功德と、相好、光明、説法、利生等の外用の功德が具っている」と強調されるゆえんがあるのであって、称名念仏の相（すがた）が現われてこそ、本学における授戒の意義があるのである。

つぎに、正授戒は、まず授戒の道場をどのように設備するかということが問題である。授戒の作法をおこなう場所を戒壇と呼んでいるが、戒壇の設備については、唐の道宣律師が著わした『関中創立戒壇図經』に図解があるから、それによるべきであるが、これは四分律の戒壇であって、純大乘の戒壇ではない。そこで伝教大師最澄は、比叡山に純大乘の戒壇を建設して、円頓戒道場としたが、しかし、これは出家の戒壇であって、在家の結縁授戒のためのものではない。ために、恵谷隆戒師は結縁授戒会に望ましい戒壇の設備図を示されている⁽¹⁴⁾。本学ではこの図示を参考として道場を設置している。

また戒師や教授師などの法衣は、授戒本尊の三聖（釈迦・文殊・弥勒）の像が比丘形の姿で粗衣を着用して描かれているのが多い。ために、戒師並びに文殊・弥勒の配役も比丘形の衣帯が望ましい。そこで、儀式には戒師は莊嚴袴の上に黒衣、如法衣（麻の九条袈裟）を着用し、金襴をさけて茶地の誌公帽子を被り手には莊嚴数珠と拂子を持つことになった。その他の配役の僧はすべて黒衣・如法衣の着用である。これは本学授戒会の特色といふべきではなからうか⁽¹⁵⁾。

さて、授戒の差定は注記することにして、正授戒の作法口述については、本学における戒師の独自のものがあるからここに掲載しておき

たい。

『授菩薩戒儀』⁽¹⁷⁾（正授戒Ⅱ作法・口述）

（戒師登高座。酒水。受者代表焼香、三唱三礼（受者一同）。

授与十念。三唱一礼Ⅱ受者一同）。

只今から授戒の儀式作法をおこなう。（○印は割笏を打つことを示す）

- 今、菩薩戒を授くるに行事の儀、すべて十二門あり。○第一開導、○第二三帰、○第三請師、○第四懺悔、○第五発心、○第六問遮、○第七授戒、○第八証明、○第九現相、○第十説相、○第十一広願、○第十二勸持。以上。

○第一 開導

開導とは、心の眼を開いて正しい道に導くことである。すでに二日間わたくして説戒師から、いとも懇切にお話を承っておりますので、授戒の意義については、すでに充分ご承知のことであるが、入学式のときにも申し上げたように、佛教大学に入学し、そしていま、このように授戒会に参加できたことは、重なりかさなり合って尽きることのない、過去の縁の積み重ねであることを味わい、ほんとうの自分というものに目ざめていたいただきたいのである。そのため、心の眼を開いて、これからの作法をしっかりと受けとめて頂くようお願いする。 ○第一 開導終る。

○第一 三帰 受者合掌（教授師指示）

三帰とは、戒を授けて頂くために、まず三宝に帰依することであ

る。今日より以後、命終るまで、仏法僧の三宝に帰依し、常に明るく、正しく、仲睦まじく生活するよう、このことを約束して頂く。只今から私がお約束して頂く言葉を三度繰り返し返すから、受者一同は私の唱える通り力強く、三遍繰り返し返してご唱和を願いたい。

○われら仏弟子は、○今日以後命終るまで、○三宝に帰依して、○明るく正しく仲よく、○生活することを誓う。

○第一 三遍終る。

○第三 請師 代表焼香（教授師指示）

請師とは、戒法をお授けになるお師匠様をお迎えすることである。そこで教授師のおさしずによって、お師匠様をおまねきする御文を唱えて頂く。受者合掌（教授師指示）

（教授師）「我等仏弟子は、今大徳に従って戒法を受け、人格を完成せんと請い願いて止まず。願くは大徳、我等がためにみ恵みを垂れ給え。受者は教授師に随って唱える。」

只今、受者一同から、私を戒師にと要請せられたが、もとより私には不徳の身、とうていその器ではなく、ただ戒法を伝えている身にすぎない。実は、釈尊から直接に戒を授かるのである。幸いなことに、この道場は、まさに三國伝来の国宝釈迦如来像の御前にて只今、いともおごそかに、授戒の儀式をおこなわさして頂いているのである。私は身がふるえるほど感激いたしている。この喜びを受者一同と共に分かち合いたいと思う。そこで、私が受者一同になりかわって、釈迦牟尼如来、文殊菩薩、弥勒菩薩の三大師匠を、また証明師とし

て十方の諸仏諸菩薩を、此の道場におくんだりして頂くよう、心をこめてお願いするから、私がお願いの文を奉読したあとに、受者一同も私と共に真心こめて三唱一礼してお願いされるように。

—戒師下座、釈尊前にて「請師文」を拝読。（請師文の掲載は省略する）。戒師登高座。三唱一礼— 受者一同〓教授師指示。

○第三 請師を終る。

○第四 懺悔

懺悔とは、過去の一切の罪を深く反省して、心を浄めることである。ただいま真心こめてお迎えした諸仏諸菩薩の御前において、受者の方々が過去から今日ただいまにいたるまでに、犯し重ねてきた罪とがを、悉く懺悔して頂くのである。そして身も心も清らかに生き変って頂くために、懺悔の文をお授けするから、一語一語私のあとについて、心して唱えるように。

受者合掌（教授師指示）。
 ○我等が昔よりつくるところの、○諸々の悪しき業は、○みな貧りと怒りと、○愚かさによれるものなり。○我等が身と言葉と、○心によりて起すところ、○すべて今我等、○悉く懺悔し奉る。

○第四 懺悔を終る。

○第五 発心

発心とは、菩提心をおこすことである。受者一同は懺悔することによって心は洗われ清められたのである。そこで菩提心、すなわち

さとりを求める心を発して頂くのである。すでに説戒によって聴聞したように、菩提心とは四つの大きな願いを誓うことでもある。こうした大願を発すために、私が唱える御文を力強く操りかえして頂くように。 受者合掌（教授師指示）

○生きとし生けるもの限りだけれども、○誓って導かんことを願う。

○煩い悩みは尽きることはだけれども、○誓って断ちきらんことを願う。

○み仏の教えは量り得ざれども、○誓って学ばんことを願う。
○悟りの道は遥かなれども、○誓って成就せんことを願う。

○第五 発心終る。

○第六 問遮

問遮とは、極悪非道な行ないをしていないことを確かめることである。過去において、障りとなる行ないがあったのでは、戒を保つ妨げとなるので、そうした行ないの有無を問いただす作法を行う。有りや否や、と尋ねるから、心をこめて「無し」と答えるように。

受者合掌（教授師指示）

○汝等、仏身より血を出したることありや否や。

○汝等、父を殺したること有りや否や。

○汝等、母を殺したること有りや否や。

○汝等、和上を殺したること有りや否や。

○汝等、師匠（阿闍梨）を殺したること有りや否や。

○汝等、指導者（羯磨僧）を殺したること有りや否や。
○汝等、聖人を殺したること有りや否や。

○障りなきことを認めて、第六 問遮を終る。

○第七 授戒

いよいよ戒を授けて頂くのである。一番大切な儀式作法である。受者は威儀を正しくして心を統一し、真心を込めて、いよいよ戒法を受けて戒の心を実行に移す堅い決意を発して頂きたい。戒とは、すべての悪いことはしない。すべての善いことを実行する。世のため人のためにつくす。という三つのことが、すなわち、三聚浄戒のことである。そして、授戒の作法は、一白三羯磨といい、同じ作法を三度繰り返して行うものである。第一作法のとき、天地宇宙に満ちた微妙不思議なみ仏の戒の力が活動を開始して、やがて受者の周辺に集ってくる。第二作法のとき、そのみ仏の力は受者の頭上に覆いかぶさってくる。さらに第三作法のとき、正しく集りきたったみ仏の力は、頭上から受者の全身全霊に浸透して身体中に満ちてくる。只今から、釈尊以来、インド・中国・日本と三国にわたって相伝えられた三聚浄戒の戒法を私が釈尊になりかわって、儀式を通じてお授けする。私が「よくたもつや否や」と尋ねるから、受者は力を込めて「よくたもつ」と答えるように。

代表焼香・一同合掌（教授師指示）

○汝等、諸仏菩薩の目前において、今日より以後命終るまで、明るく正しく仲よく生活して、一切の悪をなさず、一切の善をなし、

与えられた使命を全うして、世の為、人の為に働くことを誓い、その間においてこれを犯す事を得され。三聚淨戒、よく持つや否や。

―受者「よく持つ」と答える。三回繰り返す。―法鼓を一打、二打、三打する―

すでに三度「よく持つ」と堅い決意を示された限り、み仏のお力は受者の身中に活動を開始する。この戒法をよく実行する者こそ真の仏弟子であり、やがて香り高い人格を作り上げ、限りない幸せが得られるであろう。これからの生涯を通じて、この戒をよく実行し、決してこれを破ることのないよう心からお願ひする。

○第七 授戒を終る。

○第八 証明

いま、こうして戒法を授けられたので、これを十方の諸仏に報告し証明して頂く作法をこれから行う。受者一同は、真心をこめて合掌されるように。

―戒師下高座。仏前にて二聲。長跪して「証明文」を謹読。

(証明文の掲載は省略する)。戒師登高座。―

○第八 証明終る。

○第九 現相

現相とは、厳かな相(すがた)が現われるということである。受者の浄らかなになった心を諸仏は喜ばれる。諸仏の喜びは必ず受者の心に伝わってくるものである。その理由は、この道場で戒法を受け

て今日より以後命終るまで、明るく正しく仲よく生活すると誓いを立てたからである。受者はこれから本当に和やかな生活ができるようになる。これを現相というのであって、受者が戒法を実践することによって、生れ変わった人生の第一歩が踏み出され、家庭や職場や社会が浄化されてくるのである。

○第九 現相終る。

○第十 説相

説相とは、戒を受けた者が、最底守らなければならない十種の道徳的規範を誓うことである。いまから、それを実行するか否かを尋問する。これは受者の決意を新たにせんと呼びかけであるから、誓いを守ることを堅く念じ、力を込めて「能く持つ」とお答え願ひたい。

○第一、不殺生戒。すべてのものの「いのち」を尊び、衣食住において無駄なき生活をするを誓う。よく持つや否や。

○第二、不偷盜戒。他人の物を盗み、勤めを怠り、信用を裏切らないことを誓う。よく持つや否や。

○第三、不邪淫戒。男女おのおのその分を守り、互いに礼節を尊び、ほしいままな行動をしないことを誓う。よく持つや否や。

○第四、不妄語戒。身と口と心において嘘偽りの行ないをしないことを誓う。よく持つや否や。

○第五、不酤酒戒。自らよく考え、秩序ある生活をし、自ら慎んで他人に迷惑をかけないことを誓う。よく持つや否や。

○第六、不説四衆過戒。家族や友人を含めて他人の悪口をいわないことを誓う。よく持つや否や。

○第七、不自讃毀他戒。自分を讃めて他人をそしらないことを誓う。よく持つや否や。

○第八、不慳惜加毀戒。物惜しみをして他人に毀害を与えないことを誓う。よく持つや否や。

○第九、不慎心不受悔戒。いかなる場合でも腹立ちの心を押えて他人の過ちを許すことを誓う。よく持つや否や。

○第十、不謗三宝戒。いつも明るく正しく仲よく生活することを誓う。よく持つや否や。

いま誓ったことを、よく実行して頂くように重ねてお願いする。

○第十 説相終る。

○第十一 広願

広願とは、他の人びとと喜びを共にする願いを広く発することである。受者一同はすでに戒を授けられた今日以後、人生のほんとうの意義に目ざめ、生きがいを感じた生活の中に安らぎを得るわけであるが、世の中には物の道理をわきまえず、自分勝手な振舞をして人に迷惑をかけている我利我欲の人がいるであろう。このような人びとに身をもって範をたれるようにすること、これを広願というのである。つぎの機会には一人でも多くの後輩たちに、この授戒を受けるようにおすすぬ願いたい。

○第十一 広願終る。

○第十二 勸持

勸持とは、勧め持つことである。いま授かった戒を犯さないようにつつしみ、さらに進んで善い行ないを実行するように励むことである。しかも、この戒を保つ生活は、結局のところ、「南無阿弥陀仏」の念仏の中におさまるのである。「南無阿弥陀仏」の念仏の信仰に生きることによって、戒が保たれてゆくのであり、念仏を申してみ仏まかせの生活に入ると、自然に、相いすまぬ、申しわけない、という気持ちと、ありがたい、もったいないという気持ちとが湧きおこってくる。そうした反省と感謝の生活の中に、すばらしい人生が展開してゆくのである。受者一同は、このたび不思議な縁にめぐりあい、授戒を受けたのであるから、今日以後、命終るまで、念仏の日暮らしを続けて、香り高い人格を作りあげることが、何よりも肝要である。この喜びを永遠にくずさず持続するようお願いする。

○第十二 広願終る。

○以上十二門戒儀を終る。

—受者代表焼香—

授戒し終って、身心ともにさわやかに、み仏の子となり、本当の自己にめざめたことを、経文で唱えることにする。一句を唱えたら、大声して唱和を請う。

○衆生仏戒を受けぬれば、○即ち諸仏の位に入る、○位大覚に

同じ終りなば、○真にこれ諸仏のみ子なり。○授与十念。

―撰益文（戒師発声、念仏一会中に下高座し仏前に向う）。

総回向文。総願渴。三帰礼。戒師登高座。―

○戒牒授与

授戒を受けたしるしに、戒牒を一人ひとりにお渡しするから、尊いみ仏の教を胸におさめて、生涯の宝として受けとり願いたい。

（受者順次退堂。） 戒師退堂。 終。

以上。

四、十二門戒儀の教育的意義

教育は、人間社会におけるすべての生活活動の基盤をなすべきものである。それは人格の自覚ある人間を形成する作用であるから、人格によって人格を陶冶することをもって本質とされている。人格というものは、普遍的な価値が個性の中において統一融合して実現するのであるから、個性の生命体の上に築かれる神格あるいは仏格を意味している。すなわち、教育は、生物として生まれた人間、自然人としての「在る人間」を、理性ある人間、すなわち精神的活動をなす「在るべき人間」にまで育成する人格者の形成をいうのである。このような見地から、十二門戒儀はどのような教育的意義内容をもっているのだろうか。これについて、いささか検討を加えてみたいとおもう。

第一 開導

開導とは「開眼誘導」の義であつて、真理にめざしめることをいうのである。戒儀には「夫れ仏法の大海は深広にして涯り無し。唯信あれば能く入る、信有るに由るが故に三学成ず可く菩提に至るべし。而して三学の中には戒を以て首と為す。菩提の広路には戒を資糧と為し生死の大海には戒を船筏と為し、三塗の重病には戒を良薬と為す」と説かれ、まず仏を信じて進むことが強調されている。

本来、仏教は大自然の法、宇宙の真理を説くのであるから、戒とはこの大自然の法、すなわち宇宙の秩序である。秩序をたもつということとは人として当然在るべき姿であるが、すなおに大自然の法に溶け込めないために、人は一方では知識が深広となり知能や技能は上達して勝れても真の人格が育成されなければ、それは返って人生において禍いの因となることさえある。戒は人間として「生」を全うする道であつて、人生究極の目的は仏（真人）となることを自覚せしむるための開導である。釈尊を理想の人物として尊敬することは、釈尊は歴史的人間ではあるが宇宙の真理をさとつて仏陀（完成者）となられたその事実を信ずるのである。すなわち、仏を信ずれば、自ら菩薩道の規範である三学（戒・定・恵）が成り立つて仏果（完成した人格者）に至ることができる。しかも「菩提（さとりの）の広路には戒を資糧と為し生死（まよい）の大海には戒を船筏と為し、三塗（くるしみ）の重病には戒を良薬と為す」という、人生における戒の重要性が主張されている。これは信仰、信心の眼を開くことが誘導され、信仰の眼が開ければ悟りに向う行の足が動きだすということである。

つづいて戒儀には「然るに戒に多種有り。五八十具菩薩律儀なり。而るに五戒は人に報じ八と十とは天に報じ、出家の大戒は小解脫三明六通無余永寂を感じ。菩薩の律儀八万の細行は仏果三身四徳相好不共一切の功徳を報得す」とあって、戒の種々相を説き戒徳の勝れていることが示されている。

浄土宗における授戒は円戒と呼ばれている。円は偏に対する語で、かたよらないという円満円融の義とされ、すなわち片寄らない完全円満なる戒法という意味であり、また頓授戒とも称されている。頓は漸に対する語で、漸とは永い時間の労費、頓は頓速頓極の義で短時間の間に成功するという意味である。合して円頓戒と呼ばれ、この戒は自他平等の利益を被むるために円頓菩薩戒とも称されている。すなわち、円頓戒とは、「速やかに人格を完成するおこない」の意味に理解されるのである。したがって、この戒法には戒徳の種々相によって異名が生じている。すなわち、大(乗)戒、性徳戒、常住仏性戒、妙戒、金剛宝戒、仏戒、三聚浄戒などである。

大戒は、自他平等に利益を同じくし、広く身口意の三業を浄化することを目的とすることから大乘戒とも呼ばれる。性徳戒とは、性徳は修徳に対する意味で、修徳とは修めて得る徳である。性徳とは、性は性具の意であるから修めると修めざるとによらない。本具の理性として誰れでももっている仏性を指すのである。すなわち、この戒法は人が本来具有する仏性を開發することから名づけられ、また常住仏性の活動を起す力となるから常住仏性戒とも呼ばれる。妙戒とは妙味の意で、不純不正の人間であっても、この戒法によって急に人格の優れた

人に成る不可思議なる功徳のある戒法であるから妙戒と呼ばれている。金剛宝戒とは、この戒法は身を莊嚴し人生を美化し、世界の光りと為りうるものであるから名づけられ、またこの戒法を確實に保ち完全に実行することによって仏果を成ずることができるので、仏戒と呼ばれる。三聚浄戒とは、この円頓菩薩の大戒を三つにまとめ上げた清浄なる戒法をいうのである。

しかして、第一開導は天地の理法である戒法によって人生の目的や意義を明らかにし、授戒することによって意義ある人生を全うすることができるといふ所以を説き、戒法の実践によって香り高い人格が形成されてゆくことを強調しているのである。戒儀には「汝等今すでに人と天と小果とを求めず、唯だ専ら無上菩提を求めんと欲す。正に菩薩の律儀を受くるに堪えたりと為す。凡そ請師懺悔等一一妙法にして虔誠求受すべし」と受者に注意を与えて開導を結んでいる。

第二 三帰

三帰は、すなわち三帰戒を授けることであって、戒儀には、

我弟子等。願從今身尽未來際。歸依仏両足尊。歸依法離欲尊。歸依僧衆中尊。(三説) 我弟子等。願從今身尽未來際。歸依仏竟。歸依法竟。歸依僧竟。(三説)

從今已往。稱仏為師。更不歸余邪魔外道。唯願三宝。慈悲撰受。と示されている。

ところで、三帰とは三宝歸依ということであり、帰は「むくいる」「ゆだねる」「まかせる」「おさまる」「つき従う」「心をよせる」

「たのむ」などの意があつて、仏教では帰依とか帰命、または帰順などという熟語になつてゐる。帰依はサンスクリットのシャラナ (sarana) の訳で、尊敬に値する人に帰投し依伏することをいい、この言葉はまた信仰の意味にも使用されている。帰命はサンスクリットのナマス (namas) の訳で、音訳して南無といい、身を命を投げだして仏の教えを信奉することをいう。つまり、帰は自己のよりどころを指している。

三宝は、サンスクリットのトウリ・ラトナ (tri-ratna) またはラトナ・トラヤ (ratnatraya) の訳で、仏 (ブッダ buddha) と法 (ダルマ dharma) と僧 (サンガ sangha) のことである。仏とは真理をさとした人 (釈尊) を指し、法とはそのさとした真理の内容を説いた教えを指し、僧とはその教えを信じて修行する人びとの集まりを指している。この三宝は人生にとって最も大切なもので尊重すべきものという意味で宝と呼ばれる。宝は最勝なるものを指し、どんな時代でも、また全世界において変ることのない価値を有し、人に対して豊かな心を与えるものである。仏と法と僧の三つはちょうどそうした意味を持つことから、合して三宝と称される。

中国の隋代、仏教学者の浄影寺慧遠 (五二二—五九二) は三宝について、別相、一体、住持の三義を立てて解説しているが、要するに絶対全一である法性真如にそなわる徳を三方面から表して三宝と呼び、真如に覚照の智慧の徳相を仏宝といい、真如に不変の軌範となる徳相のあることを法宝と指し、また真如に違逆のない徳相を僧宝としてゐる。⁽¹⁹⁾ また唐の高僧、善導大師 (六一三—六八一) は、三宝こそ人のよりどころであるとし、大乘經典の一つである『仏説観無量壽經』の真意を發

見し、その真実の教義を集め記することに先だつて、「先勸大衆發願歸三宝」と発言されている。このことばは、善導大師が全世界の人びとに対して、人生の大事な基盤である信仰心を喚起せしめられたものと思われる。善導大師は仏道の修行によって真理にめざめ、すべての生きとし生けるものは仏の慈悲によって生かされていることを体認心証された。それゆえに、人びとは先ず信仰心を發して三宝 (仏教) に帰依するところが第一であると警告されたのであろう。三宝について、善導大師は「仏は是れ衆生の無上の大師なり。邪を除いて正に向わしむ。法は是れ衆生の無上の良薬なり。能く是れ煩惱の毒病を斷じて法身清淨ならしむ。僧は是れ衆生の無上の福田なり」とい⁽²¹⁾つて、教育的な説示をさしている。日本においては、聖徳太子が十七条憲法を制定して、その第二条に「篤く三宝を敬え、三宝とは仏、法、僧なり」「四生の終帰にして万国の極宗なり」「三宝によらずんば、何をもつてかまがれるをたださん」と、格調高く人格の要請を強調されていることはあまりにも有名なことである。

三宝は、仏教を成立させる三つの要素である。この三つは相互に関連しているものであるから、そのなかのどの一つが欠けても仏教とはいえないのである。仏があつてこそ仏の説かれる法 (教) があり、また仏は法を説かれるからこそ仏であり、仏の説かれる法もまた対者なしの法では成り立たない。ゆえに、法なくして僧は成立しないし、また僧を予想しない法もまたありえない。ゆえに、仏教に帰依することこそ三宝帰依というのである。それゆえに、三帰は、仏教徒になるために授かる戒法の基本となり、仏道修行の起点としてゐるところである。

日本や中国の仏教徒たちは、つぎのような三帰依文を唱えている。人身うけがたし、今すでにうく。仏法聞きがたし、今ここに聞く。この身今生において度せずんば、さらにいづれの生においてかこの身を度せん。大衆もろともに至心に三宝に帰依し奉る。

みづから仏に帰依し奉る。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して無上意をおこさん。

みづから法に帰依し奉る。まさに願わくは衆生とともに、深く經藏に入りて知慧海の如くならん。

みづから僧に帰依し奉る。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して一切無礙ならん。

また、南方の仏教徒たちは、パーリ文で、つぎのように唱える。

ブッダンサラナムガッチャーシ (Buddhan sarrain gacchāmi)

ダンマンサラナムガッチャーシ (Dhamain sarrain gacchāmi)

サンガンサラナムガッチャーシ (Sangain sarrain gacchāmi)

このパーリ文の三帰依文は、さらに二たび三たびとくりかえして唱えられている。これは日本でも最近では仏教音楽法要のなかに組み入れて歌われている。

このようにして、三宝に帰依するということは、自分が誓いをたてて仏のようなやすらぎの境地を得たいためであるが、これはとりもなおさず自己の人格完成を願っているのである。三宝帰依は、ことばをかえていえば、明るさ（仏）、正しさ（法）、なごやかさ（僧）を希求する人間の根本意欲の自覚にめざめしめるものである。それはまた教育的見地から、「謙虚にして真理探究」（帰依仏）「誠実にして精進

努力」（帰依宝）「親切にして相互協同」（帰依僧）とも訳されている。⁽²²⁾人は全生命を帰投して人間活動を開始することとなりうるのであって、また、この根本意欲を自覚せしむるものが三帰であり、ここに、三帰の教育的意義が表明されるといわなければならない。

第四 懺悔

懺悔とは、一切の罪過を懺悔告白することである。すなわち、第三の請師において戒を授かるために、不現前の五師（釈迦牟尼仏・文殊菩薩・弥勒菩薩・十方諸仏・一切菩薩）を道場に請待する作法が終ったから、そこで、釈尊を初め諸仏諸菩薩の尊前において悉く懺悔するのである。戒儀に「告げて云う。夫れ戒は是れ白淨の法なり。法器清淨にして、方に進受に堪えたり。故に哀を求めて懺悔すべし。以って身心を洗う」とあって、懺悔の目的は身心の淨化にある。

淨土教における懺悔観については、もっとも深いところの無明煩惱によって生死の世界に流浪して理に背き教えに逆らうところの人間の根元的罪惡観によって、その根拠が成立するのであるが、懺悔は自己の罪過を反省するところに教育的意義がある。すなわち反省は、「過去を整理し」「現在を確認し」「将来を創作」するのである。戒儀においては授戒のために懺悔が必要であるが、それは仏戒を授かるということが、仏教の教えにみちびかれて、しっかりとした心をかためるのであるから、それには、どうしても反省が必要なのである。反省のない歩み、そこには動くことはあっても進歩はない。もちろん理想に向って猪突的に進む歩み方もあろうが、しかし反省のない場合には、それ

が反って退歩になっていても人は気づかない場合もあるであろう。この反省こそ、また宗教の基盤をなすものであって、謙虚にして正しく反省することを常に人間に実践せしめる力、それをまた仏戒というのである。信仰のない人間、反省のない人は、たとえ知的に秀でていても、また技術的に優れていても、それは、人生の進歩や人間社会の向上に貢献することはむずかしいのである。

第五 発心

発心とは、さとりを求める心を発心して自利他の人格完成の願いを発動することである。戒儀には「告げて云う。懺悔しおわって、次に菩提心を発心すべし」といい、「衆生は無辺なれども誓って度せんことを願う。煩惱は無辺なれども誓って断せんことを願う。法門は無辺なれども誓って知ることを願う。無上菩提なれども誓って証せんことを願う」と度、断、知、証の四弘誓願が示されている。これは四つの誓いをたてることであって、「一切の人びとを転迷開悟せしめたい」「利己的迷いを断ち切って利他的な悩みに浄化せん」「あくまでも真理眞実を探究せん」「最高理想の成仏まで進まん」とする大菩提心、すなわち人格を完成しようという決意を起すことである。

第七 授戒

授戒とは、戒を授けることで、第六の問遮によって遮難無きことを確認したので、ここにおいて、まさしく三聚淨戒を授けて戒体を発得する。すなわち「撰律儀戒」(一切の悪をなさず)。「撰善法戒」(一切

の善を作す)。「撰衆生戒」(一切の衆生を利益す)ということをも、儀式作法を通して決意するのである。

この作法は、三度繰り返すので一白三羯磨と呼ばれている。すなわち第一作法のとき、天地に充ち満ちている戒体が活動を開始して、受者の周辺に集まり、第二の作法で、その戒体は受者の全身に浸透して身心にみなぎり、第三の作法で、戒体は身体中に充滿して活動を開始するのである。これは授戒することによって、動機、決意、動作、結果と戒体の発動が感受され、やがて廃悪修善の道德的行為が実践されて、香り高い人格が形成されてくるのである。

第十 説相

説相とは、『梵網經』に説く十重禁戒の戒相を説き示すことである。すなわち、「不殺生戒」(生命の尊重)。「不偷盜戒」(正義の尊重)。「不邪淫戒」(秩序の尊重)。以上の三は身のいましめ。「不妄語戒」(信義の尊重)。「不酤酒戒」(智慧の尊重)。「不説四衆過戒」(相手の尊重)。「不自讚毀他戒」(反省の尊重)以上の四は口のいましめ。「不慳借加毀戒」(布施の尊重)。「不瞋心不受悔戒」(慈愛の尊重)。「不謗三宝戒」(心理の尊重)以上の三は意のいましめである。

第十一 広願

広願とは、広く願いを起すことである。戒義に「我弟子等、願くは受戒所生の功德を以て法界に廻施し、未だ苦を離れざる者をば願くは苦を離らしめ、未だ楽を得ざる者をば願くは楽を得せしめ、未だ菩提

心を発さざる者をば願くは菩提心を発さしめ、未だ断悪修善せざる者をば願くは断悪修善せしめ、未だ成仏せざる者をば願くは早く成仏せしめ、又此功德を以て、願くは一切衆生と共に」と説示している。

人は、すべてだれでも希望や理想を持っているが、それが単に自分本意のものであってはならない。それは大自然の道理にめざめ、自他共に人格を完成しようという広い願いでなければならぬ。人びとと共に安らぎを得、人びとと共につとめはげんで、香り高い人格を造りあげるような願望をいだき、理想実現へ邁進することを教えている。

第十二 勸持

勸持とは、勧め持つ義である。戒儀に「すでに得戒しおわって、良薬を服するごとく、まさに禁忌及び補養を知るべし。自行断悪を禁忌と為し、利他修善を補養と為す云云」と説示されている。

禁忌というのは、常に自己を反省して、戒法を犯さないように、己をつつしんで行くことであり、補養とは、たえず戒法を実行してそれを他人に勧奨することをいうのである。したがって、この二義は、戒の道徳的意義を明かにしたものであり、つねに自己をいましめ、自他共に規律正しい生活をなし、世のため人のために、ともに人格を完成するようにつとめはげむことが指示されている。

以上、十二門戒儀についていささか検討を加えてみたのであるが、戒儀における戒法は、単に道徳的人間形成のみならず、そこには人間のあらゆる生活活動の基盤となる教育の原理が内在していることを知らなければならない。しかも、それが十二門の組織によって成立し

ている。このような人間の真の教育が実施されず、人格の教育、生命の教育が軽んじられて、いたずらに、科学偏重、論理過重、知識中心のいきすぎた教育が採用される場合には、偏向の社会が生まれることはいうまでもない。その結果、人びとは平和を求め快適な生活を望みながらも、闘争に終始する不安な生活を送らなければならないことになる。これはまた、情意の陶冶や訓育に重点がおかれても、他の教育指導の面が不徹底であれば、虚儀虚飾の生活になり、かえって円満融和の社会は成立しないことになる。

これらはみな教育の本質を忘れ、人間には生命があつて知・情・意の精神活動のあることを忘れた結果によるのである。それは、人間として生命活動が何であるかを知らないで、動物としての人間活動に執られたすがたを示すものである。それはまた、物欲に支配されて物欲を支配することを知らない結果によるのである。このような意味において、真の人間教育、正しい人格教育をおこなうことは何よりも大切なことである。人間教育は、すなわち仏戒にあることをわれわれは重視しなければならない。そこに宗教教育の重要性が強調されるゆえんがある。

五、むすび

仏教が成仏（真人）を目的としている限り、釈尊の根本精神は、人間をして人間たらしめる人格の完成に向わしめることにある。それは、

人間の中にひそむ聖なるもの（仏性）を発見し、それを育ててゆくところに、仏教の教育的意義が存するからである。これを宗教教育というのである。宗教教育の理想目標である聖なる価値は、全生命の对象的価値であって、すべての文化的価値の基盤となるべき価値である。それは、仏教でいう真如である。真如はまた動的生命に即して「法」ということもできる。すなわち、それは縁起の実相そのものである。

その聖なる価値の体現者、あるいは具現者が真理にめざめた人、すなわちブッダ（Budaha 仏陀、覚者、如来）と呼ばれるのである。宗教教育は、この人格化した理想を「あるべき人間像」として、教育の理想目標としているのである。それゆえに、これは全生命の全体的な目標であって、この理想的人間像、すなわち聖なる価値をつねに慕っていく生活のなかに人間の本質的すがたがあるといわなければならない。

宗教教育は、このような過程において起こる現象であり、文化の進展も、歴史の進歩も、芸術の創作も、経済の発展も、みなこの人間の人間としての生命の拡充活動によるのである。したがって、このような諸種の精神活動は、もしもその基盤である生命活動がそのために攪乱され、あるいは拡充されない場合には、聖なる価値は実現されず、人間としての完成は成就されないものである。それゆえに、このような意味において、宗教教育は、あらゆる教育活動および文化活動の基礎としておこなわれなければならないのである。

宗教教育、すなわち仏教教育とは「生きる人間の育成」をいうのである。それは、真に生きること、正しく生きることを指導する教えである。

あり、正しい生命活動をする人間、人格を形づくるための教えである。⁽²³⁾ このような意味において、本学における学生授戒会は、最もすぐれた教育的意義を有するものである。それはまた、釈尊の戒律の精神が現代社会に偉大な機能を発揮することであるといわなければならない。

注

- (1) 『仏教大学例規集』二二頁。
- (2) 昭和五十年十一月二十三日遷化。
- (3) 昭和五十四年十一月三日遷化。
- (4) 『仏教大学史』四六三頁参照。
- (5) 『仏教大学例規集』一四八頁。
- (6) 「ぶつだい」二号以下。「宗教部報―白道―」など。
- (7) 『浄土宗法要集』には、五重相伝に準ずるとし、期間は七日。前六日間を前行、七日目を懺悔会・正授戒としている。
- (8) ○開講式差定 Ⅱ 学生入堂。導師入堂。無言三拜。月かげ（浄土宗々歌）。

香偈。三宝礼。四奉請。剃度作法（開導・酒水灌頂・剃度・懺悔・三帰・三竟・袈裟授与）。開経偈。四誓偈。回向文。十念。撰益文。念仏一会。総回向偈。十念。四弘誓願。三唱礼。送仏偈。以上。○朝のおつとめ Ⅱ 香偈。三宝礼。四奉請。懺悔偈。十念。開経偈。四誓偈。回向文。十念。授戒会礼懺儀。礼拝。念仏。導師退堂。以上。○日中のおつとめ Ⅱ 奉請文。半斉供養。三尊礼。撰益文。総回向偈。十念。四弘誓願。三唱礼。送仏偈。以上。○夕べのおつとめ（音楽法要） Ⅱ 衆会。月かげ。四弘誓願。法然上人頌。授戒会のお

た。礼拝。念仏一会。礼竟回向疏。総回向偈。十念。以上。

学生授戒会時間割

日	初 日	中 日	結 日
6:00		起 床・清 掃	起 床・清 掃
7:00		お つ と め	お つ と め
8:00		朝 食	朝 食
9:00		朝 説 戒 ⁽³⁾	調 正 授 戒
10:00	集 合・点 呼	休 憩	調 正 授 戒
11:00	オリエンテーション (班別・その他)	休 説 戒 ⁽⁴⁾	記念撮影・閉講式
12:00	開 講 式	お つ と め	祝 膳
1:00	昼 食	昼 食	解 散
2:00	礼 拜 戒 ⁽¹⁾	礼 説 戒 ⁽⁵⁾	
3:00	休 憩 戒 ⁽²⁾	休 説 戒 ⁽⁶⁾	
4:00	休 憩	休 憩	
5:00	お つ と め	お つ と め	
6:00	夕 食	夕 食	
7:00	清 話 (清涼寺貫主)	座 談 会	
8:00	入 浴	入 浴	
10:00	就 寝	就 寝	

(9) 普通には、三帰、五戒、三聚淨戒、十重禁戒、十二門戒儀などの肝要を講説する。

(10) 浄土宗全書、十五卷所収。

(11) 統浄土宗全書、九卷所収。

(12) 右同。

(13) 『選択本願念仏集』第三章念仏往生本願篇(土川本三一頁)。

戒律の現代的意義

(14) 惠谷隆戒著『結縁授戒講話』一〇九頁。

(15) 『浄土宗法要集』(二九二頁)には、伝戒師は大衣被著のこととしている。

(16) 正授戒差定(午前八時)。調読。香湯。香水。塗香。触香。授者入堂。差座。証明師等入堂。道場酒水。喚鐘。奏楽。戒師入堂。無言三匝。喚鐘(三下)。露地偈。教授師入堂(逆一匝をもって戒師を迎える)。戒師・教授師入堂。本尊前(香偈・三宝礼・表白)。戒師転向(登高座)。受者代表焼香。一同三唱三礼。授与十念。一同三唱一礼。正授戒(菩薩戒、作法・口述)授与十念。撰益文(戒師発声)。念仏一会(戒師本尊前)。総回向文。

三帰礼。〇戒牒授与(戒師転向登高座・代表焼香・灌頂酒水・戒牒授与)。授者退堂。戒師転座(本尊前)。三唱三礼。戒師退堂。証明師等退堂。以上。

(17) 仏教大学学長・水谷幸正教授の口述『授菩薩戒儀』である。現在、多種の『授菩薩戒儀』口述書の中、最も簡潔にして、しかも、教育的口述書である。原本は、いわゆる「話し言葉」であることを、申し添えておことわりしておく。

(18) 戒儀の引用文は、本文中すべて、『授菩薩戒儀』新本。統浄土宗全書、九卷所収を読み下し文で掲載した。

(19) 『大乘義章』巻一〇、大正藏經、四四卷、六五四頁の中。

(20) 『観経疏』玄義分、十四行偈の標題。(浄土宗全書、二卷、一頁)。

(21) 『観経疏』定善義、(浄土宗全書、二卷、四三頁の上下)。

(22) この三帰依の文は、京都市政学園創立の精神であり、校訓となっている。

(23) 仏教教育については、三枝樹正道著『仏教教育論』の研究論文集の好著がある。